

---

# 触れたい声

描猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

触れたい声

### 【Nコード】

N8613G

### 【作者名】

描猫

### 【あらすじ】

人とは少しずれた感性の持ち主である彩子は最近恋人と別れたばかりの30歳。恋人と別れ一人になった事に不自由は感じていないが人になかなか心を開けない自分がある事に気が付き葛藤していきます。彩子はこれから色々な出来事と出会いを通じて本来の自分を見つけて行きます。

## 真っ白なキャンバス

また眠りにつかずに朝を迎えてしまった。

彩子さいこは窓を開け新鮮な空気を思いっきり吸い込むと日に日に冷たくなりつつある外気に秋の訪れを肌で感じた。

鮮やかな明け方の茜色の空を見ながらふと思いついたのは高校の美術部で描いた油絵の地塗りに暗い紫を選んだ私に顧問の先生が言った言葉。

「あなた、何か悩みでもあるの？」

先生の突発的かつ無責任に発したとしか考えようの無い質問に私は無表情でこう答えた。

「いえ、特にありません。あつたらこんなところでのんきに絵なんか描いてないんで」

先生は面を食らったような顔をして一瞬私を見つめた後こう続けた。

「悪気があつて聞いたんじゃないのよ、絵に暗い色を使う人は深い悩みを抱えてる人が多いって聞いた事が有ってね……。」

いかにも私はあなたの心情を察して気遣ってるのよ、大人の私に何

でも話してごらんさいと言いたげな台詞に私は高見の見物をされている、または檻の中の動物にでもなったかのような気分になりそこまで察することができる人がなぜもつと言葉と場所を選べないのかとその無神経さにかっかりした。

初めての油絵の完成を待たずして美術部を辞め用事がない限り二度と美術室に行く事はなくなった。

先生のおっしゃる通りです。でも先生は決して相談に乗ってもらいタイプの大人では無いので「頼れて素敵な大人」を自演するのならば他の生徒でお願いします。私は先生の素敵な物語の出演者にはなれそうにもないので観客として拝見させていただきます。

私は当時、深い悩みの中でもがいていて毎日の学校も放課後の友達付き合いもバイトも全てをけだるく過ごしていた。

悩みの内容は漠然としている物で息をすることさえ面倒だと思ってしまうがちな日々を私はただ力なく早く時間が流れる事だけを願って生きていた。

心の根底に暗い紫色の痣あざを隠し持ちながら生きてた私だったけどあれから10年以上の時が経ち29歳になった私は当時の先生と同じ歳の頃になった。

今の私をあ頃の私が見たら彼女の眼にどう映るのであろうか。

きつと女子高生だった私はこの空のように鮮やかな色を使う事に実

は憧れていたんだらうなと思しながら彩子は布団にもぐった。

最近は週末に昼夜逆転の生活をすることが多い。

夏まで付き合っていた男の仕事が不規則だったのでその習慣が今だに残っているであろう。

そして何より夜中の静けさの中で高ぶる自分の気持ちが好きだった。

空が白んでくる頃に彩子の気持ちも少しづつ落ち着き睡魔がおとづれ眠りに落ちる。

深夜だから許される事の面白さを三十路を手前にして気がつきその独特な雰囲気を楽しんでいるのかもしれない。

目が覚めると部屋の時計の針は昼の12時を少し前にさしていた。

すぐに布団から出てシャワーを浴びそれから服を選び化粧をして友人に会いに出かけた。

土曜日の繁華街は歩くのも困難なほど人が多いのであまり人ごみの中に入るのが得意でない彩子は友人に地元でゆっくりと会うことを提案していた。

私の生れ育った街は住宅の多い場所で駅の周辺にはショッピングビルやそれなりの飲食店、カラオケ、少し移動すれば大きな公園などがバランスよく揃っており普段は電車に乗って地元を出なくても充

分に要足しのできる場所であつた。

最近の移動手段はほとんど徒歩である。お気に入りの音楽を聴きながら街の風景や季節の花などを見て歩くのが好きなのである。また歳をとると共に避けられない体の衰えに少しでも歯止めをかける為の気休めでもあつた。

写真を撮るのが好きだから歩きながら携帯電話に付属されているカメラでの撮影もした。近所の猫や花を中心によく晴れた日の空や珍しい建物などもよく写真に収めた。

「あ、猫だ！」

「猫ちゃん、こっち向いて 写真撮ってあげるからさ」

周りに自分以外の人間がいない事を察知してから猫に話しかける。

まるで素人なアングルで猫の間抜けな顔の写真を撮ると満足してまた歩き出す。

鼻歌、写真、散歩、この3つで私はある程度の喜びを得られる。贅沢を知らない時代に生まれた女の些細な幸せの時間。

待ち合わせ場所に着くと見慣れた柔らかい笑顔に迎えられた。

「ちょっとだけご無沙汰だね」とはにかんだ笑顔のまま彼女は言う。  
「やっぱりきよちゃんの方が先に着いてる」と私も馴れ馴れしさにエンジンのかからないままこう切り返えした。

彼女は清美きよみと言って私の古くからの友人。素直な気持ち<sup>きもち</sup>を伝えられる唯一の女友達だ。

お目当てのケーキの食べれるカフェまで歩いてる最中にお互いの軽い近況を話すともう二人はいつもの関係を取り戻しくだらない事を言っでは大きな口をあけて笑ってる。

店に着くといつも窓際にどっかりと腰を下ろすと手早くオーダーを済ませ二人は同時にガラスのコップに注がれた水を飲み目を合わせた。

きよちゃんの次の一言を私は何となくわかっていて目をそらす。

「研二さんと結婚するかと思ってた。あれだけ凄い勢いで話してたのに何が有ったの?」

予想以上に予想通りの問いかけに私の頭の中でクイズ番組の正解のシーンが浮かんだ。

「いや、あのあ・・・何というか」

煮え切らない私の態度にきよちゃんは痺れ《しびれ》を切らして身を乗り出すようにこう言った。

「まさか騙されてたとかじゃないよね??？」

今度は予想もしない台詞に私は度肝を抜かれ一瞬言葉を失った後に笑いがこみ上げた。

「ないない、それないよきよちゃん」

普通なら神妙な面持ちで話すであろう結婚間近まで行った恋人との別れ話を私は笑顔で話そうとしている。

「ん〜とね、お互いにお互いを思いやる心が薄れちゃったの。でも結婚とかして長く連れ添ってたらそんな事はきつと当たり前のように日常に起こるようになるよね。そんでその時どうしたらそれでも伴侶と関係を続けられるかって考えたのさ。」

ここまで話して私はコップの水を一気に飲み干した。話の続きを待つきよちゃんは水を凄いい勢いで飲みほす私をじっと見ていた。

「私の中で答えが2つ浮かんだのね、一つは私はあなたの妻です。だから何が有っても私はあなたについて行きます。って腹を決めて旦那さんに尽くすか。でもそれが出来たら今回の事で別れたりしないよね。だから私には無理だと思った。」

そこまで言つと何か言いたげだったきよちゃんも口を開いた。

「まあ、お互いにお互いを思いやるって事を忘れたらどんな夫婦で

も長く付き合うのは難しいよね。確かにあんたは尽くすと言っても思いやりの無い言葉を一言貰うだけでピーピーいう子だし」

長年の付き合いから私の性格と恋愛傾向を知り尽くしているきよちゃんは的確なコメントを私に返した。

それに対してのコメントは延べず私的な本題を話し始めた。

「全くの他人である異性と長く付き合っていくには恋とか愛とかも大切だけどお互いにお互いを認め合って尊敬してないと続かないと思った。」

まだ水の入ったグラスを眺めながらきよちゃんはため息交じりに私を見た。

「そんで？研二さんの事は尊敬してなかったのね？良い人だったじゃない 誠実で優しく思いやりもある人だと思う。何も一度の食い違いで一生の別れを下すこともなかったんじゃない？」

きよちゃんの言う事はいつも正しくて私は彼女の言う事なら親の言う事よりも素直に聞く。

確かに研二は私にはもつたいたくないくらいの男性だった。でも何かいま一つ全てをさらけ出せない感じが有った。これからの人生を共に過ごすであろう二人なのにまだ知らない事が多すぎたしこれからの付き合いでお互いが安心して共に過ごせる関係になれるか不安になったのだ。

何か大きな事件が有った訳でもないが漠然と研二との関係が続けこ

のまま結婚をしてしまうのかと思うと無性にこれまでのスムーズに運んでいた恋愛に少し怖さを感じた。

そんな時研二との間に私が別れを決心する出来事が有った。

私の母と初めて3人で食事をする事になった時の事、日にちを決めて店を予約し母はその日に合わせ美容院に行き服を新調してこの日をとても楽しみにしていた。

会う事になっていた当日の午後研二からメールが入った。

「ごめん！急にしばらく会って無かった友達から連絡があつて今、地元に戻って来てるらしいんだよ すまないが今日の予定をずらしてくれ」

あっけに取られた……。今日の食事会をなんだと思ってるんだろう。これから結婚するかもしれない相手の母との初めての対面を断っていくら久々に会う友達とは言えそちらを選ぶなんて……。

私はその時すぐに話し合う事も気持をぶつける事ができなかった。

そしてそれがなぜできなかったのかという理由を自分の中で冷静に分析してある一つのとんでもなくぶっ飛んだ答えを出した。

私は研二と今後分かりあう事はできそうにない。したがって別れよう。

一度は自分で自分に突っ込みを入れたほどその極端なその答えを私は怖いほど冷静に心の中で一度噛み砕いて考えてみたけどやはり同じ様な答えが出たのでそれを相手に伝えるという行為を実行する決意を固めた。

それを研二に伝えたのはそれから数日後の夜だった。

何日かして私の心も変化するかもしれないと思っていたが変化はおとずれず彼に別れを告げた。

彼は取り乱すこともなければ理由を聞くこともなく私の言葉を素直に聞きいれた。

すなわち恋人という関係が終わりその瞬間全くの他人に戻った。

共通の話題もなく趣味も違つ、尊敬する事も、ともに過ごす時の安らぎすら感じない2人からSEXを取ったら何も残らなかった。驚くほど。

その人が好きだから、何かを共有したいから、自分の考えを伝えたくて分かってほしくて一緒にいたいというものではなく、明らかに淋しいから、恋人が欲しいから、人肌恋しいからという気持ちからのスタートだったのだ。

私はこの別れに後悔など全くしていない。

たいして不便もしていない若干の淋しい気持ちと今まで恋人のために使っていた時間を持て余すという事以外は。

そして私の心のキャンバスはきつと真っ白に戻ったのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8613g/>

---

触りたい声

2010年10月21日14時09分発行